九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

尾道学の方向性

荒木, 正見
総合文化学会 | 尾道学研究会 : 顧問

https://doi.org/10.15017/1955365

出版情報：総合文化学論輯. 7, pp.2-8, 2017-11-01. Japan Institute for Comprehensive Cultural Studies
バージョン：
権利関係：

尾道学の方向性

荒木　正見

「尾道学」（Onomichi-gaku＝Onomichi Studies）という言葉で新たな学問の可能性を提唱したのは筆者で、荒木正見編著・鈴木右文共著『尾道学と映画フィールドワーク』（中川書店、2003年）では次のように述べられている。

すなわち、尾道学の提唱として「広島県尾道市とその周辺を、総合的学問の視点から見つめなおし、その本質的意味を確認」（4 頁）することとしている。

このことを、哲学者としての筆者は、最も根底的な考察から説き起こすため、主に西田幾多郎の哲学的場所論に拠って、場所論と地域学の繋がりを求め、そこから「尾道」という特定の場所を学問として考察することの広がりについて考察した。

この論文はそのことを一般の方々にわかりやすく述べた講演（2015.7.15・於：尾道市立大学）を基に再構成したものである。

この論文の大まかな構成は、はじめに、最も根底的な哲学的場所論を述べ、徐々に、尾道に言及しつつ、理論から実践へという方向性をもって、その都度生じる研究テーマや研究姿勢についてその一端を述べる。

Ⅰ　地域学の根底としての場所論

哲学的場所論に関しては、筆者はすでに各方面で論文化しているので、ここでは、以後の展開を意識した骨子のみを述べる。

a.「ある」ということの意味

哲学の主なテーマとは、「あるとはなにか」ということである。

その「ある」ということ、すなわち存在に関してそのひとつの解答が、存在とは唯一絶対無限なものだということである。

すなわち、世界はたった一つの無限な存在そのものであるといえる。

例えばヘーゲルにとって絶対的存在は「精神(Geist)」と呼ばれるが、「精神が自分の中を進み行くときにはその自己意識の夜に沈んでいるが、その消えた現存在(Dasein)は、その中に保存されている。」(G.W.F.Hegel, *Phänomenologie des Geistes*(1807), Verlag von Felix Meiner, 1952, S.563-564)と述べられるように、唯一絶対無限な存在は、それ自体の一部としての個々の実在を自覚すれば個々の対象が認識できるが、本来それは絶対的存在の中に眠っているようなものだと

考えられる。

このように、世界や宇宙の文字通り全てが、物質的な存在も精神的な存在も、もろもろの全てが、この唯一絶対無限な存在に含まれることになる。

b.「無知の知」という知り方　―フッサール哲学によせて―

我々の知は、限界もあれば誤解もする。このことに気付くことが哲学の始まりだとしたのが、ソクラテスの「無知の知」、すなわち自らが無知であることを知ること、である。

その近代的な説明を、フッサールの現象学に求めることができる。

「現象学の理念(E.Husserl, *Die Idee der Phänomenologie:fünf Vorlesungen*, Martinus Nijhoff, 1973)」などに示されるフッサール現象学の概要は以下の通りである。

現象学的還元（Phänomenologishe Reduktion）:

「あらゆる超越的措定の排除」（*Die Idee der Phänomenologie:fünf Vorlesungen*, S.5）エポケーとも呼ばれるが、これは、自分の判断は主観を越えて客観的超越的であるとする超越的判断を括弧に入れて、すべての認識は主観的なものだと認識しなおすことである。

本質直観：

他方フッサールは本質を直観することの意義を述べる。直観は個々の分析的な認識に較べて全体を捉える総合的判断である。従って、主観の枠を超えた真理を直観するのは理想ではあるが論証不能であるし、「無知の知」を考えればきわめて困難である。

論理的解釈：

直観では得にくい真理を分析的に求めるのが論理的判断である。これは、分析的判断であり、ある前提を関数とするような判断である。すなわち、前提に限定された範囲での真理である。これは情報を前提に基づく因果性で結ぶもので、他人に依る論証が可能である。

構成理論：

フッサールの構成理論は、一つの事柄は世界総てによって構成されたものであり、本来客観的なものであるとされるものである。このことは、後継者ハイデッガーの循環理論をその典型として、論理的思考と、我々の真理認識への可能性を開くものである。すなわち、本来客観的なその客観性を求めて我々は主観の枠を通して指向的に客観性へと迫ることができ、繰り返し誤謬を修正しつつ真理へ迫るというその構造は循環的だというのが循環理論であり、客観的真理へと迫るその方法が論理である。

c．場所と歴史という考え方

唯一絶対無限な存在という「ある」に関する考え方には、反面、「個とはなにか」という問いが成立する。この点に整合的に答えるのが西田幾多郎(1870-1945)の場所論である。一見抽象的な思考構造であるが、そこでは生命の意義、個と全体との関係などの根拠が示される。

以下もすでに各所で述べてきたが、西田幾多郎の難解な叙述を、筆者が先に事典項目として執筆したものをもとに（中村元監修、峰島旭雄責任編集『比較思想事典』東京書籍、2000 年＝拙筆項目「場所[現代思想]」412-413 頁）、纏めたのが以下の各項目である。

・ 唯一・絶対・無限な存在としての場所。

西田幾多郎にとって、「場所」という語は、古来哲学のテーマであった「存在」そのものを指す。「存在」とは、唯一・絶対・無限な存在と、個々の存在（もしくは存在者）を意味する場合があるが、西田幾多郎はまず、唯一・絶対・無限な存在を「場所」と呼ぶ。

すなわち、「場所」はすべての個々の存在対象をその部分とする唯一のものである。古来しばしば呼ばれてきたように「神」や、「存在」とさえ呼ばないのは、特定の先入観で定義してはならず、また、意識の対象であってはならないからである。容器のような感覚で「ありか」と名付けたのである。

・ 場所の自己限定と個による場所の限定。

絶対的な全体と個の関係は、次のように述べることが出来る。

「全体としての場所は個を限定し、個は全体の表現や発展として場所を限定する。」

すなわち、全体が個を生むのであるから、全体は全体的な構成によって個を限定するのであるが、生み出された個は、個として自己表現する。我々は絶対的な全体を一気に認識することは出来ないが、個々の存在（者）を通してそれらの無限な総体としての全体を認識する。その個が豊かであればあるほど、全体は豊かになる。このように、個は全体を限定し、全体と個との相互限定が成立する。

・ 場所論における歴史的根拠。

さて、このように全体と個とは、相互に限定しあっているといえるが、それは静的なものではなく、脈々と動いていくものである。その動きの軌跡が歴史となる。従って「全体と個の相互限定のダイナミズムが歴史となる」と述べることが出来る。

・ 歴史理論に基づく人間、社会解釈。

ここから、このような歴史理論に基づく解釈学の可能性が開ける。すなわち、「歴史における全体と個の相互限定のダイナミズムを解析すれば事柄の本質が見えてくる。」として、新たな解釈学の可能性を探ることが出来る。

このような場所論の応用においては、場所を具体的、空間的な場所に置き換えても、さらには、特殊な個別的事柄、例えば個人や抽象的な概念に置き換えても相互限定のダイナミズムが成立することを確認する。哲学的な理論は最も普遍的な理論であり、その構造が普遍は特殊な状況に適用されなければ真の普遍とはいえないからである。あくまでその語によって表現された全体と、それに付随する個別的な事柄との関係として捉え得るものである。

Ⅱ　尾道学の方向性

さて、以上の哲学的場所論の理論を具体的な尾道という場所に置き換えると、その考察の方向性は以下のように考えていくことができる。

始めにその対象を確認するが、事柄としては尾道に関すること全てが対象になる。しかも考察にとどまらず小論の最後に至るように、現実的実践までもその方向に含む。哲学的場所論はそれらすべてを「生存」を前提とする倫理的価値観に包まれて提起するものだからである。

a.　尾道の二重構造　全体と個

全体と個という二重構造は、尾道という具体的な場所において、次のように考えることができる。

まず、唯一絶対無限な存在、すなわち全世界全宇宙と、個としての尾道である。尾道を容器のように包む絶対的全体と尾道との関係を考察する。

次に、場所としての尾道と、個としての人や事柄の関係を考察する。

この場合、重要なのは、歴史を見る射程である。

唯一絶対無限な存在、すなわち全世界全宇宙と、個としての尾道とは、相互に関係しあい限定しあって歴史を作ってきた。歴史をこのような視点から解析することが求められる。

また、歴史に対する視点は、場所としての尾道と、個としての人や事柄の関係との関係を考察することにもつながる。個人の自由な業績も、因果的には場所としての尾道とつながっている。なお、この「場所として」を物質的場所だけで考えてはならない。あくまで存在論的な場所であり、この場合はいわば、言葉としての「尾道」と考えておいた方が妥当であろう。

b.　世界やアジアや日本の中の尾道

以上の視点を具体的に適応する試みの一端としては、尾道を個とする、世界やアジアに対する相互限定を考えることができる。尾道学が提唱されるべき理由の一つは、尾道が、古来、瀬戸内海航路の重要な寄港地であったこと、にある。当然ながら富と文化が集積し、アジア一円にまでその名は広まっていた。それゆえに生じた様々な経済的・文化的遺産については総合的な視点から研究しデータ保存すべき価値があるといえる。

c.　尾道ゆかりの人や事柄、組織

以上の研究の場合、物理的な尾道に存在するものは当然だが、物理的には尾道の外に存在していても尾道という揺りかごから発したものも、当然ながら尾道学の研究対象である。

例えば、「いか天」という食品がある。烏賊を揚げたものだが、広島県にそのほとんどの会社があり、その半数以上が尾道にあることは、尾道の人間なら誰もが知っている。しかし、尾道の烏賊の漁獲量はそれほど多いわけではない。簡単な歴史をたどるならば、それは江戸時代に尾道に寄港していた北前船が運んできた原料を尾道で加工してきたのである。尾道はこのように船舶航路の重要な寄港地であり、それゆえに富と文化の蓄積が起こった。全国に知られた食品の背景を詳細に研究することは、今日の尾道の産業振興の手掛かりともなる。

さらに、尾道市出身の映画監督・大林宣彦監督を挙げることもできる。映画「転校生」(1982)を始め名作映画を尾道で撮影したが、それだけではない。国内は勿論海外でも撮影したが、やはり監督については敬意をもって「尾道の」大林宣彦監督と呼ぶ。このような大林映画の全容を研究するのもやはり尾道学である。

尾道市立大学教授であり、ファンタジー小説の名手としての小説家でもある、本誌でも論じてきた光原百合氏もその一人である。尾道を象徴的に捉えたうえで、独自の小説世界を構築されているその姿と、その意味を分析、解釈することは筆者自身の研究テーマでもある。

勿論、このような尾道の風土・人物を考察する先駆を指摘することもできる。文化 13 年（1816 年）に尾道の人・龜山士綱（福山の菅茶山〔著：『福山志料』〕の弟子・墓所は信行寺〕が著した『尾道志稿』はその筆頭である。

このような文化人や政治家、アスリートに至るまで尾道の歴史においては枚挙にいとまがない。尾道は古来、産業界をはじめとして多くの人材を輩出し、「文学のこみち」に示されるように多くの人材を迎えてきた。それら人材とその仕事を精確に述べることもまた重要な試みである。

そして、それらの人々を生むに至った組織的背景も見逃すわけにはいかない。尾道学、ということであれば、尾道市立大学では尾道学の講義が行われている。尾道市立大学の経済情報学部と芸術文化学部という組織自体が尾道そのものである。尾道学の講義が行われている大学それ自体の在り方や努力されている研究・教育内容もまた貴重な尾道学の対象である。

d.　多様性の価値原理と尾道

尾道を学問の対象とする場合、数多い神社・仏閣を見過ごすわけにはいかない。それらが信仰の対象である以上、物質的な神社・仏閣をのみ観察するのではなく、精神性にも目を向けなければならない。歴史的には我が国屈指の寄港地であった尾道は、古来、豊かな経済に潤った町だが、そのことは、多様な文化が交錯し、必然的に多様性の価値意識が育ち、それに密着する人類愛、普遍的愛、信仰などが発達した。

特に現在でも、阿弥陀如来信仰である、浄土系の浄土宗、浄土真宗、時宗の寺院が多い。特に時宗は、庶民性の強い宗派として尾道に広まった。

ここで、筆者が常々考察している多様性の価値原理の意義を簡潔に述べておく。

人類最後の危機管理は想定外に対する危機管理である。想定外が起こった時、多様な知識があれば、そのどれかが対応できるかもしれない。たったひとりそれを知っているものがいれば人類はコミュニケーションによって危機を回避することが出来る。そのために人は本能的に一元的思考ではなく多様な思考や自由な生き方を望む。環境保護、他の生き物に対する保護、愛の意識、などはすべてこの本能的な多様性原理に基づくものである。但し、知識としてはすべて多様に知る方が生存にはプラスになるが、実行したら人類が滅ぶようなことを実行してはならないことは確実に守らなければならない。また、主に経済的余裕がない場合には、極端に合理性を追求しなければならないあまり、多様性が制限される場合もある。尾道が豊かであったためにこそ、多様な思想、信仰、弱者保護の思想などが発達したといえる。このような視点から、古文書などをひも解くのも尾道学としては重要な仕事である。

e.　発展的・発達的指向性

尾道学のような地域学を論じるにあたって、重要な視点は、発展や発達に向かおうとするダイナミズムを捉えることであり、それを生かしてより良い発展を目指して実行するところにある。

ここで「より良い」とは、人類にとって普遍的な意味合いを有するものである。従って、倫理学的、哲学的根拠に基づいて理論化すると同時に人類愛や多様性の価値原理などを感性として受け止め、理論と感性を両輪として具体的に実行していくことが求められる。このような発展こそが、腰の強い発展・発達であることは、尾道の歴史においても経験してきたことである。

たしかにこれまで述べてきたことからも明らかなように、「衣食足りて礼節を知る」的な意味で、経済的ゆとりが多様性の価値を実現しやすく、倫理的にも有利であることは一般的にはいえるであろう。しかし、かといって、経済性だけを究極の目標にすればリスクを抱え込むことは各地で経験してきたことである。

2001 年に筆者がフィールドワークを行った大分県臼杵市も尾道と同様、古来、瀬戸内海航路の寄港地として発展してきた町でそれゆえに武将・大友宗麟はかの地に城を築いた。近代になって、船舶性能が発達して寄港地としての賑わいが無くなって来たときに、某大企業が工場を設置する希望を持ってきた。近代の多くの町が工場で潤っているのを横目で見ながらも、臼杵の方々はそれを受け入れなかった。経済的にはたしかに不利な状況ではあったが、他の受け入れる町には無い凝縮した文化や産業もあり、臼杵の方々はそれを守る方向を選んだ。工場煤煙などを敵とする、酒造、味噌醤油醸造、製薬、漁業など多様な文化や産業が保存され、発展を遂げている。このような意識の高さは、教育の質にも影響を与えている。確かに大都会のような派手さはないが、住民にとって大切な Quality of Life が守られているといえよう。

このような普遍的価値観を目安として、尾道はそれらをどのように求め、どのように発展させてきたのか、また、主に経済的変化とともにどのように対応してきたのか、などを調査し検討するのもまた尾道学の課題である。そしてここに至れば、すでに、現実的行動、町の政策などにも

関連が生じてくることは当然である。

ｆ． 現実的行動を伴う尾道学

ここに至って尾道学は、現実的行動へと結びついてくる。政治を筆頭に、産業、交通、観光、教育、文化、伝承など、枚挙にいとまはないが、尾道学としての統合性からいえば、小論の当初からの考察を参考にしつつ実行することで合理的で質の高い発展が期待できる。合理的、とは歴史の方向性から未来を読み取ることだし、質の高さとは、ヒューマンな生存を目標とすることである。特に後者は、宗教的下地のある尾道だけに他の地域よりも発展に寄与し易い環境を持つ。阿弥陀如来の教えのように、人とすべての生き物の生命を大切にすることは、質の高い町を作り上げていくことだと知っている尾道の方々は、目下「猫の町」で観光に寄与しようとしているが、猫以外の、犬や野生の生き物とも調和を保つ生き方を模索することがより高い町づくりに結びつくことを歴史は教える。猫は船の鼠の繁殖を防ぐためだし、犬は船乗りの留守家族を護るために飼われてきた。このようなほんの一例の考え方は、すべての現実的行動に展開して考えることができる。

かく考察し、研究し、行動で発展に貢献し続けることこそ尾道学であるが、最後にあえて「学」と名付けた理由に言及する。ひとつは、すでに述べてきたように哲学・倫理学の根底から生存を目標として論理的に展開することである。いまひとつは、エビデンス、すなわち論拠を精確に構築することである。特に現実的な行動までを尾道学の方向性に含めるのであるからこの両輪は住民の生活に直結する。他の町で面白そうだから、とだけの理由で尾道に植え付けるのではなく、尾道の歴史と風土を踏まえて「面白そう」を実現すべきであろう。そのためには、現在、平谷祐宏市長のもとで尾道市が編纂している尾道市史の試みが重要な意味を持つ。作業自体は、古文書解読やお祭りの記録や産業の歴史の掘り起こしなどの地道で根気のいるものであるが、それぞれを精確かつ学問的純粋性を以て行えば行うほど、現実的行動の指針となる。

そして、小論自体もまた尾道学の一端であるが、現時点ではいわば入門的ラフスケッチでしかない。言及したことしなかったことのすべてを丹念に取り上げてデータベースを作り、精確に論じ続けることが今後の必然的課題である。

参照・引用文献

G.W.F.Hegel, *Phänomenologie des Geistes*(1807), Verlag von Felix Meiner, 1952

E.Husserl*, Die Idee der Phänomenologie·fünf Vorlesungen*, Martinus Nijhoff, 1973

中村元監修、峰島旭雄責任編集『比較思想事典』東京書籍、2000 年＝拙筆項目「場所[現代思想]」412-413 頁

[Direction of “Onomichi Studies”]

[ARAKI, Masami・総合文化学会、尾道学研究会顧問、哲学、比較文化]